ユニット自由選択制の新入生を迎えて

理事長　福井　有

今年度の新入生は、先程の報告にあったように、そのモチベーションや期待値において今までとは全く違う学生が入学してくれると理解していただきたいと思います。すなわち「大手前大学で」、「自分の関心を見つけて学んでみたい」という学生が入学してくれたのだということです。

期待値が高いと言うことは彼らの期待にこたえられなかった場合の落胆はより大きく反動としてでるので本腰を入れて教育指導にあたってほしい。

日本教育学会の会長や特色ある教育プログラムの審査委員長を歴任されたICUの絹川正吉先生によると、ユニバーサル化時代の大学教育の要諦は、専門学部構造をリベラル化し、個別学生の個別学習を可能にすること。さらに卒業時の学力レベルはすべての学生が同じレベルを期待しない。それぞれの学生にとって付加価値があればよし。バラバラの学生にそれぞれ意味のある学士課程の構築が必須であるとのお話を聞きました。

中教審の審議過程においては、これだけ国際的に日本の大学教育が低いと評価された以上「卒業資格検定試験」の導入も検討すべきという議論もなされているやに聞いています。

誤解のないように申しておきますが、我々は専門教育を解体したのではありません。2学部5学科であった従来の構成を3学部44専攻にして、学部間において垣根を低くして自由選択させるというシステムに変えたと言うことなのです。

専攻はむしろ以前より増えているのです。リベラルアーツ学を学ぶのではなくリベラルアーツ・カレッジをめざして今回のシステムにしたと言うことなのです。

お陰で867名もの新入生が内定、これは3学部とも1.29倍の理想的な構成です。逆にもしこの改革を断行していなかったら、これだけの意欲に燃えた学生をこの人数集めることが出来たでしょうか。

今ひとつは学生達のやりたい学問を提供する大学を目指していきたいと思います。まず始めに彼らは「大学で学んだことを生かして就職したい」と7割の学生が答えています。

入学決定理由で一番に「専攻したい分野がある」と答えながら、このユニット自由選択制のことを競合他校と比べて「独創的である」と評価しています。

また履修ユニット計画表を細かく見ると一番人気が「映画で学ぶ心の世界」で551人、次が「インターネット社会」494人、それから「メディア文化入門」が3位で492人の新入生が登録希望をしてくれており、まさに今の時代を反映しているものと思われます。

867名の新入生の6割近い学生が、履修を希望しているということを理解し、この科目を担当する先生はいい講義をしていただきたいと思います。

評論家の船橋洋一氏の週刊朝日のコラムに、昨年5月に行われたアイビーリーグの名門エール大学リチャード・レビン学長の卒業式スピーチについてのコメントがあります。レビン学長は「旺盛な好奇心と独立志向そして公務、献身の3つは生誕300年を迎えたベンジャミン・フランクリンの特質だった」とし、その精神が今も求められていると述べた後、今年の卒業生の4分の3以上が入学の時に選んだ専攻とは別の専攻を選んだことに触れ、「これは旺盛な好奇心の表れだ」と評価したそうです。

我々もレビン学長のこのスピーチの内容をかみしめて新しい年度を迎えたいものです。

伊丹のキャンパスは、短大と合わせて1191名もの新入生を受け入れる準備でおおわらわです。

これは昨年より実質600名の増員となり、一時的には混乱するかもしれませんが、なんとか喜ぶべき状態を全員の力で乗り越えていただきたいと考えます。